

第 I 部

各機能の説明

1 ライブラリ生成アルゴリズムについて

本プログラムは基本的に「ライブラリ生成プログラム」となる。よって、各種パラメータ設定ファイルに加えて、流体計算の場合は”condition.f90”というファイルで直接初期条件と境界条件を設定しなければならない。これらのファイルは”raw”というサフィックス付きでディレクトリにコピーされる。

GUI インターフェースである GUI.py は、checkout.py を動かすための input ファイル (checkout.inp, checkout_model.inp, checkout_chem.inp) を生成し、checkout.py を実行するプログラムであり、主動作は GUI.py を用いた場合でも全て checkout.py が受け持つ。

checkout.py は input ファイルに基づき、各種ライブラリを生成するプログラムである。基本的にライブラリの生成は、該当ファイルをディレクトリからコピーすることによって行い、ある特定のファイルを除いては fortran ソースファイル自体を checkout.py が編集することはない。コピーされるファイルは全て”store”のサブディレクトリ内に入っており、checkout.py またはユーザーによって編集が加えられるファイルには”.raw.”というサフィックスがつけられている。なお、checkout.py 内でそのソースファイルの編集が終了する、つまりそれ以上ユーザーによる編集が不要になったファイルからは自動的に”.raw.”サフィックスが取り除かれ、そのままコンパイルにかけられるようになる。

1.1 ディレクトリ構造

基本的に類似する機能を持つファイルがまとめられている。例えばオイラー陽解法と LU-SGS 法は”time_scheme”ディレクトリ内に”euler”, ”lu-sgs”としてそれぞれ格納されている。また化学計算と流体計算は基本的に同一ライブラリを用いることになっている。以下、全てのディレクトリについて説明を行う。

2 流体コード

checkout.py から呼び出された”store/checkout/checkout_flow.py”によって生成される。生成されたファイルは”checkout”ディレクトリ内に生成される。

2.1 自動生成ファイル

流体コードで自動生成されるファイルは、checkout.py で選択されたディレクトリ内にある”部分的なファイル”をつなげることで生成される。自動生成されるファイル及びその”部分的なファイル”は以下のとおりである。

- main.f90... 主プログラムがかかれたソースとなる。主ループもここで回される。以下の順にファイルの内容が追記されていく。
 - main.top.f90... ”program main”からモジュールのインポートまで。
 - main.head.f90... 共通して利用する変数の定義。
 - main.variable.f90... それぞれのスキームで特有に利用される変数の定義。

- main.part_init.f90... 変数の初期化。グリッドの読み込みやそのバイナリファイルの生成や幾何やコピアン生成、熱力学ライブラリが必要とされる場合にはその初期化も行われる。
- main.body.raw.f90... 初期化。restart.bin がある場合はそれを用い、ない場合は初期化サブルーチンを用いて初期化を行う。また主ループを回す変数も初期化される。part_primitive という文字列がファイル内に記されており、後述する文字列に置き換えられる。主ループの開始まで記述してある。
- main.main.raw.f90, main.main.point_implicit.f90... 主ループ内部を記述しており、時間スキームのディレクトリ内に格納されている。part_point_implicit, part_primitive, part_main という文字列がファイル内に記されており、それぞれ以下の文字列に置き換えられる part_point_implicit に文字列が存在する場合 main.main.point_implicit.f90、存在しない場合 main.main.raw.f90 が使われる。なお、point_implicit なスキームを受け付けない時間積分法 (ex.Dual Time Step) には main.main.point_implicit.f90 は存在せず、無理やり使おうとする場合コンパイルエラーが起きる。
 - * part_point_implicit...point_implicit に計算される部分がここに入る。現状、化学生成項の時間積分を進めるサブルーチンがここに入りうる。main.part_point_implicit.f90 にかかれた文字列に置き換えられる。
 - * main.part_primitive.f90... 時間刻みの計算やデータアウトプット前にすべき処理、具体的には基本量の計算及び境界条件の設定をするサブルーチンがここに入る。main.part_primitive.f90 にかかれた文字列に置き換えられる。
 - * main.part_main.f90... 高次精度化や対流項及び拡散項の計算、時間積分に必要な場合にはそれらの保存量やコピアンが計算される。main.part_main.f90 にかかれた文字列に置き換えられる。
- main.footer.f90... 主ループの終了及び MPI 関数の終了処理、”end program main”を記述してある。
- Makefile...Makefile. 以下の順にファイルの内容が追記されていく。
 - Makefile.head... コンパイラに何をを使うのか定義する。アーキテクチャ (PC かスーパーコンピュータ) によって変更される。
 - Makefile.var ... 各種変数の定義
 - Makefile.main... 各オブジェクトファイル作成ルール
 - Makefile.footer... プログラムの最終的なコンパイル部分及び clean の定義
- control.raw.inp...cfl の定義やファイル出力間隔の定義など。使用する場合、MUSCL のパラメータもここで入力される。control.part.inp に記された内容が入力される。

2.2 store/core

どのような場合にも使用されるファイルがまとめられてある。上記自動生成ファイルのための各種ファイルの他、以下のファイルが存在する。

- check_convergence.f90... 収束判定及び途中経過ファイル, restart ファイルの生成を行っている。
- init.vi...vim 用初期化ファイル。これを読み込むと、RUN コマンドで ./main を走らせることができる。
- inout.f90...restart ファイル読み書きや途中経過ファイル書き込み。
- n_grid.raw.f90... 重要なパラメータの定義。以下の文字列は checkout.py で置き換えられる。

- NPLANE...multi-block で block の数。multi-block でない場合 1.
- NumI... それぞれの面での i 方向セル数
- NumJ... それぞれの面での j 方向セル数
- NIMAX...i 方向セル数最大値
- NJMAX...j 方向セル数最大値
- NumY...rho の数.ex) 理想気体:1, flame sheet, 完全平衡モデル:2, 素反応モデル:化学種数
- NV... 拡散で空間微分をとるべき次元数.flame sheet で 3, 完全平衡モデルで化学種数.
- GridFileName...plot3d で記述されたグリッドファイルの場所.

また以下の文字列は IC や BC の設定に使える。

- dimq ... q(後述) の次元
- dimw ... w(後述) の次元
- indxg ... w に於ける比熱比のインデックス
- indxht ... w に於ける質量あたり全エンタルピー (J/kg) のインデックス
- indxR ... w に於ける質量あたり気体定数 (J/kg/K) のインデックス
- indxMu ... w に於ける粘性係数 (Pa*s) のインデックス
- prmtr.f90...pi やモルあたりの気体定数の定義.
- read_control.f90...control.inp の読み込み. 全計算に共通する部分に限る.
- scheme.f90... 流束項評価サブルーチン. 現在は SLAU のみ.
- variable.f90... 一般的に使われる変数がまとめられてある.
 - q ... 保存量.
 - * インデックス 1 から nY : それぞれの気体グループ (理想気体なら全化学種、flame sheet が完全平衡モデルなら燃料と酸化剤、素反応モデルならそれぞれの化学種) の密度 (kg/m^3)
 - * インデックス nY+1 : x 方向運動量 ($\text{kg}^*\text{m}/\text{s}$)
 - * インデックス nY+2 : y 方向運動量 ($\text{kg}^*\text{m}/\text{s}$)
 - * インデックス nY+3 : 全エネルギー (J/m^3)
 - qp ... 前ステップの q
 - qpp ... 全ステップの qp
 - w ... 基本量
 - * インデックス 1 : 全化学種の密度の和 (kg/m^3).
 - * インデックス 2 : x 方向速度 (m/s).
 - * インデックス 3 : y 方向速度 (m/s).
 - * インデックス 4 : 圧力 (Pa)
 - * インデックス 5 ... nY+4 : それぞれの気体グループの質量分率
 - * インデックス nY+5(=indxg @n_grid.f90) : 比熱比
 - * インデックス nY+6(=indxht@n_grid.f90) : 全エンタルピー (J/kg)
 - * インデックス nY+7(=indxR @n_grid.f90) : 気体定数 (J/kg/K)
 - * インデックス nY+8(=indxMu@n_grid.f90) : 粘性係数 (Pa*s)
 - vhi ... それぞれの気体グループの生成熱を含む内部エンタルピー (J/kg)
 - wHli,wHri, wHlj, wHrj ... 高次精度化で予測された w(ex. MUSCL). 'l' は'left'、'r' は'right'、'i' は i 方向に +1/2 を足した位置、'j' は j 方向に 1/2 を足した位置。例えば、wHli(:,2,3) は $w_{2+\frac{1}{2},3}$

の左側の値を表す。

- $TG_i, TG_j \dots$ それぞれ i 方向 j 方向の流束項 TG . TG の定義については嶋田テキストの Section 9 参照. これらの値も $1/2$ だけセル中心からずれた場所の値であり、ずれ方は wH と同じ。
- $TG_{vi}, TG_{vj} \dots$ 粘性項.
- $Vol \dots$ 軸対称問題ではそれぞれのセルの体積、二次元問題では面積。
- $ds_i, ds_j \dots$ i 方向 j 方向にそれぞれ垂直なセル辺の長さ。軸対称問題ではさらに半径がかけられる。これもセル中心から $1/2$ だけずれた場所の値。
- $v_{ni}, v_{nj} \dots$ それぞれ ds_i, ds_j で示された辺の直交正規ベクトル (絶対値 1). 向きは i, j 正の向き。これもセル中心から $1/2$ だけずれた場所の値。
- $x_h, r_h \dots$ メッシュ格子点の座標. これもセル中心から $1/2$ だけずれた場所の値。
- $x, r \dots$ セル中心の座標.
- $dt_mat \dots$ local time step のそれぞれのセルでの Δt
- $dt_grbl \dots$ global time step の Δt . (スペルミスったので 'r' です。)

また全ての計算において、以下の値を `control.inp` で設定する必要がある。

- Max Step Number... 計算を再開してからの最大ステップ数.
- convergent RMS... 収束とするエネルギー残渣.
- CFL Number... CourantFriedrichsLewy 数.
- File Output Period... ファイル出力周期.

2.3 store/architecture

アーキテクチャ依存のサブルーチン. サブディレクトリは PC と SC でそれぞれ PC とスーパーコンピュータに関するファイルがある. SC には `mod_mpi.f90`、PC には `mod_mpi_dummy.f90` が使われる。スーパーコンピュータの場合は `grid_separation.inp` からそれぞれのプロセッサが受け持つグリッドの範囲を計算し、変数を初期化する. PC の場合は MPI 関数のダミー関数を入れている。どちらの場合も以下のように受け持つブロックの範囲, i 方向の範囲, j 方向の範囲が定義される。

- ブロックの範囲... nps から npe
- ブロック plane の i 方向の範囲... $nxs(plane)$ から $nxe(plane)$
- ブロック plane の j 方向の範囲... $nys(plane)$ から $nye(plane)$

パソコンの場合、 $nps=1, npe=Nplane$ である。

2.4 store/dim

軸対称流か二次元流かを選ぶものである。サブディレクトリは 2d と q2d で、それぞれ以下のファイルが含まれている。

- `store/dim/2d...geometry.f90` と `init_Sq.f90`
- `store/dim/q2d...geometry.f90` と `Sq.f90`

Sq は軸対称流のとき式変形の際ソース項に出てくる値を定義しており、二次元流では 0 である。init_Sq.f90 と Sq.f90 はそれぞれ Sq に関する処理を行っている。geometry.f90 には plot3d で記述されたグリッドファイルの読み込み及び可視化用バイナリファイルの生成、幾何ヤコビアンやセルの面積を計算するルーチンがまとめられている。

2.5 store/high_order

高次精度化を行うルーチンである。サブディレクトリは muscl と upwind であり、それぞれ MUSCL スキームと風上差分が入っている。MUSCL を用いる場合、以下の項目を control.inp で設定する必要がある。

- MUSCL ON(1)/OFF(0)...MUSCL の on/off 切り替え。1 で on, 0 で off. その他の値は受け付けない。
- MUSCL Precision Order...MUSCL のオーダー調整。2 と 3 のみ受け付け、2 の場合は $\kappa = -1$, 3 の場合は $\kappa = \frac{1}{3}$ に MUSCL のパラメータが設定される。

2.6 store/time_step

global time step または local time step が設定される。ファイルは set_dt.f90。またこのどちらかを選ぶことにより、checkout.py の DT_GLOBAL_LOCAL が dt_mat(i,j,plane) または dt_grbl が設定され、時間積分スキームの該当する部分で置き換えられる。

2.7 store/time_scheme

時間スキームの選択。main.main.raw.f90 や main.main.point_implicit.f90, 時間積分サブルーチン (time_...f90) が入っており、主ループ (時間積分ループ) の中身を定義する。

- euler... オイラー陽解法。
- RK2... ルンゲ=クッタ 2 次精度。
- LU-SGS...LU-SGS で実装したオイラー陰解法。上記の他 sch_lusgs.f90, var_lusgs.f90 で LU-SGS 法を行う。
- NR...Newton-Raphson 法。同様に LU-SGS 法を使う。後述するパラメータを用いる。上記の他 sch_NR.f90, var_NR.f90 で LU-SGS 法を行う。
- precon... 前処理法を用いた Newton-Raphson 法。同様に LU-SGS 法を使う。上記の他 sch_precon.f90, var_precon.f90 で LU-SGS 法を行う。仮時間ステップにも前処理行列をかけている。後述するパラメータを用いる。
- dual...Dual Time Step。同様に LU-SGS 法を使う。後述するパラメータを用いる。上記の他 sch_dual.f90, var_dual.f90 で LU-SGS 法を行う。
- preconLU-SGS... 前処理法をオイラー陰解法 (LU-SGS) で実装している。上記の他 sch_precon.f90, var_precon.f90 で LU-SGS 法を行う。

NR,precon,dual で用いられるパラメータについて これらのスキームでは以下のパラメータを control.inp で定義する。ただし、 ω は内部反復の緩和係数である。

- InternalLoop CFL tau... 疑似時間ステップの cfl 数
- InternalLoop Omega Max... 最大緩和係数。以下 ω_{\max} とする。
- InternalLoop Omega Min... 最小緩和係数。これを割り込む ω が設定されると、計算を中止する。
- InternalLoop Dqrate Max... 各気体グループの密度の内部反復あたり変化割合の最大値。以下 Dq_{\max} とする。
- InternalLoop ResRateWarn... 内部反復が収束していないことを標準出力に投げる最小エネルギー残渣比
- InternalLoop ResRateErr... 計算を中止する最小エネルギー残渣比
- InternalLoop OutOmega... ファイル internal.res.dat に緩和係数 ω の履歴を出すか。
- InternalLoop Max Number... 内部ループ数 (固定)

これらのスキームの内部ループで、保存量 q は緩和係数 ω をかけられた Δq により更新される。 ω は以下のように定義される。

$$\omega = \min(\omega_{\max}, \frac{Dq_{\max}\rho_i}{\Delta\rho_i}) \quad (1)$$

ただし $i = 1 \dots n_Y$ である。これにより、 ρ_i の一内部反復での変化は Dq_{\max} 以下に抑えられる。この定義であると、 ω が小さくなりすぎることがある。それを補足するのが”最小緩和係数”のパラメータである。

内部ループの発散は’InternalLoop Omega Min’, ’InternalLoop ResRateWarn’, ’InternalLoop ResRateErr’ で補足されることとなる。ここでエネルギー残渣比は (最後の内部反復でのエネルギー残渣)/(最初の内部反復でのエネルギー残渣) と定義している。なお、NR, precon, dual の時間スキームでは、基本コンセプトは”内部反復が収束”することに基づいているので、エネルギー残渣比が十分小さくならない場合はコンセプト自体が崩壊している。よって、その場合これらのスキームは使うべきではない。(これを見落としている研究は大変多く、私は悲しい。)

パラメータ調整方法 To adjust the parameters, if you set ’InternalLoop OutOmega’ to true, you can get ’internal.res.dat’. (For fast calculation, please set it false.) This file records internal step number at 1st column, the relaxation factor calculated by Dqrate (not modified by Omega Max) at 2nd column, and the residuals rate of (current internal step)/(first internal step) at 3rd column. I will show some criteria to change the parameters from this record. Increase ’InternalLoop Max Number’, when the residual rate decrease exponentially but does not reach the ’InternalLoop ResRateErr’ because of the shortage of the number of internal loop. Decrease ’InternalLoop Max Number’, when the residual rate reaches the limit at the step number far less than the ’InternalLoop Max Number’. Increase ’InternalLoop Omega Max’, when the convergence of internal loop is very slow compared with the standard below, and the relaxation factor is controlled mainly by this factor. Decrease ’InternalLoop Omega Max’, when the omega does not increase exponentially and the relaxation factor is determined by Omega Max at first internal step. This situation occurs when the Delta q of internal step is too large and becomes poor estimation and is not controlled by Dqrate, so at first step the updated q becomes too poor to be modified by other internal steps. Increase ’InternalLoop Dqrate Max’, when the convergence of internal loop is very slow and the relaxation factor is controlled mainly by this factor. Decrease ’InternalLoop Dqrate Max’, when the omega does not increase exponentially and the relaxation factor is determined by Dqrate Max at first step. These do not have theoretical reasons. They depend on my experiences. So they may be wrong. Please try various parameters.

パラメータの目安 0.1 @ Omega Max...If it works well, 0.8 or 0.9 is also OK, I have used 0.01 also in dual time step scheme. 0.001 @ Omega Min... Any calculations below this limit have never yielded proper answers. I think this limit should be fixed. 0.01 @ Dqrate Max... To be honest, this parameter works only when multi species are used. I have used 0.001 in this value in dual time step scheme. In my experiences, 0.1 was too big. 1.e-5 @ ResRateWarn and 1.e-3 @ ResRateErr ... I think you should decrease ResRate at least three order of magnitude. So I propose that 1.e-3 @ ResRateErr is fixed. Because ResRateWarn yields only warnings, you can select a value you want for this parameter. 60 @ Max Number ... This number is used when multi species problems are calculated. In my experiences, 20 is sufficient at ideal gas problems. I have used 100 when I calculated multi species problems with Dual Time Step schemes.

2.8 store/viscosity

non-viscous viscous

2.9 store/therm_lib

NASA chemkin ideal

2.10 store/cond

core no-nV with-nV

3 NASA 熱力学データベース自動生成

4 化学コード